



### 変わりゆく葬儀

弘教寺住職 中山英昭

近年葬儀の形態が変化してきています。住職方が集まりますと、このことが話題になることが多くなりました。

最近頻繁に「直葬」と言う言葉を聞くことがあります。僧侶等を呼ばず、儀式もせず、ご遺体を火葬し、そのまま墓に納骨するとうやり方の方です。今都会を中心に多くなっています。徐々に地方にも浸透してきているように思います。

私が住職を継いだ30年前には、近所の隣組の皆さんが葬儀を取り仕切り、葬儀社の方が関わろうとすれば、「余計な事をするな!」と叱られたといひます。近所の男衆、女衆が奉仕で通夜・葬儀を行うことがあたりまえの時代でした。その当時は今のように公私の葬儀斎場もなく、自宅葬がほとんどでした。通夜の会食では、精進の料理が出され、この地域では、「きんぴら」「オカラ」「厚揚げ豆腐」「うどん」等が定番でした。それぞれの隣組の味があつて今は懐かしい思い出となっています。

日本の社会が豊かになるにつれ、隣近所とお付き合ひも薄くなり、やがて葬儀社が中



第33号

発行所

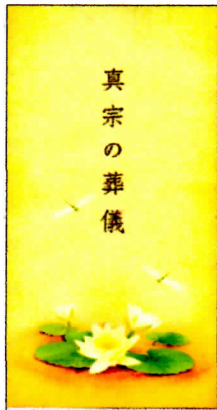
〒370-0131  
伊勢崎市境米岡二七九-1  
浄土真宗本願寺派弘教寺  
寺報編集部  
電話0二七〇(七四)〇五七三

心の葬儀となり、各地に葬儀社の営む斎場が出現します。高度経済成長期中、少しお金はかかっても、斎場などで行った方が楽という思いから、一般化していったように思います。

また、その時代は結婚披露宴同様にハデな演出も入り、白い鳩を飛ばすようなこともありました。喪主や遺族も「百人来てくれた」「二百人来てくれた」とハデに故人を送り出すことが、誇りとして語られました。

平成元年あたりだったでしょうか、バブルの崩壊と同時に、「清貧」の言葉が示すように披露宴同様、葬儀も大きな変化をすることになります。家族葬として、他人を呼ばず、近親者のみの葬儀が多くなってまいりました。

さらに、簡略な「直葬」や「釜前の読経ですます」等の形態が生まれることとなります。今年の一月に築地の教務所から「真宗の葬儀(真宗教団連合)」というリーフレットが送られてきました。「葬式不要論」「葬儀の意味」「いのちを見つめて」の3項目に分けて葬儀の意義を示しています。



身近な方との死別を縁として仏法(念仏の教え)に出遇うことが、真宗の葬儀の大事な意味合ひであります。

とくに、日常生活の中で、仏法と疎遠になつている現代人にとっては、死別を通して仏法に出遇うていく大切な場であり、「死」の体験によつて、「いのち」を見つめ直す大事な機会ではないかと思ひます。

僧侶の立場でお話しますと、最近通夜を省略する傾向がありますが、葬儀の時以上にご法話をさせていただく大事な場ですので、是非お勤めさせていただきたいと思ひます。

身近な方の死別にあわれた時、経済的な事情で、葬儀をためらうようなことがありましたら、葬儀社さんに依頼される前に、まず、住職に相談して下さい。予算的なことも含めて、いろいろご提案できると思ひます。

長寿社会の今日、80代、90代の門徒さんの葬儀が普通になっている時代、戦時中・戦後の食糧難等の困難な時代を必死に生き、子育てをし、命を受けつないで下さった方々を簡単に送り出して良いとは思ひません。寂しく悲しい行為ではないでしょうか。

葬儀を通して、子や孫にその方の命の重みを伝えることも大事なのではないのでしょうか。

また、身近な方を送り出すことで、「生死の問題」「私のいのち」を考える大切な機会と考え、大事にしてほしいものです。 合掌

一日一日の命を大切に 西正裕

妻・諏美江は2年前の夏の終わりに突然心筋梗塞で亡くなりました。いざとなるとなすすべもなく帰らぬ人となりました。今まで家庭の一切を任せきりでしたので、突然の死に啞然となりました。

お浄土に旅立った妻に心配をかけないためにも家事に挑戦、食事作り、掃除、洗濯を一人でやってみて妻の仕事の大変さを知り、「ご苦労さま、ありがとう」と感謝の気持ちでいっぱいです。

床をともし、子供をはさんで川の字で寝ていたころの思い出が走馬灯のように頭の中で駆け巡ります。今は「おくい」と言っても返事が無く、自然に涙が溢れてきます。

「もつと愛しているとさえよかったです」「もつと大切にすればよかったです」「もつと行動で示せばよかったです」「あの時、あんな言い方をしなければよかったです」と過去の自分の言動をフォーカスすれば、きりがありません。後悔の念(思い)ばかりです。「愛別離苦」の日々ですが、妻との数々の良き思い出を胸に、残された我が人生、一日一日を大切に過ごしてゆきたいと思えます。



最愛の妻が毎朝飲んでくれたコーヒを仏前に供えて仏恩報謝に勤める日々です 合掌

命を考える

聴聞できて幸せ 泉昌子

「臍臓がんです」と病名を告げられた瞬間に体中の血がスーッと引いていった。しかも、レベル4。先生の前で涙が流れて止まらなかつたが、主人の問いは「この後どの位生きられますか？」その時の主人の心はどんな思いだったか。

その後子供たちと話し合い、今まで通りの生活で笑顔と笑い声のある日々を送ろうと決めました。「出来るだけお寺で皆様とお会いしたいとの願いを叶えよう」「ひとときでも今まで通りの生活を送ろう」と思いつめて、食事の仕度中に何度涙を流したか、それでも最後の最後まで主人の前では涙を見せませんでした。

治療中にご本山の法要に日帰り参拝できた事は大きな思い出になりました。「お寺で聴聞したんで死は怖くない」と何度となく耳にしたものです。お互い安心し合いました。

夫がお浄土に往生する前に二人で話す機会もあり沢山の話ができました。最後に語った「思い残す事は何もない」の言葉が心に残ります。さらに、「お陰様で晩年はお寺でご聴聞ができ、私はご住職とお話ができた事は幸せ者だった」と苦しい中での笑顔が優しかったです。夫の意志に反して臓器提供が出来なかつたのが悔やまれたようでした。 合掌



会社定年の後、千葉県九十九里の友達の所で古代米栽培を田植えから稲刈り収穫、その後餅つきまで3年間のお手伝いを致しました。その間に野菜作りの刺激を受けました。地元の伊勢崎市に戻り近くの畑を借りて家庭菜園を始めて4年になります。農家の苦労や難しさもよくわかってきましたが、今では年間30種類の野菜が作れるようになりました。野菜作りの作業には常に市販されている野菜を目標にしております。安全・安心な野菜を旬の時期に美味しく食べられるのはとても幸せを感じています。

現在は畑仲間も大勢になってきましたので、野菜談義をしながら、お互いに切磋琢磨して益々美味しい野菜ができてそうです。気象条件や害虫・鳥・病気などの障害があるけれど、これからも「美味しいね」と言われるような野菜を作りたいと思っております。

野菜の命を美味しくいただくことにより、自分達の命も延ばしていけると感謝しつつ頑張って栽培してまいります。

命をいただく 松元保昌



合掌

### 教区仏教壮年会結成記念日一泊研修会報告

第36回東京教区仏教壮年会連盟結成記念日研修会が箱根「湯本富士屋ホテル」で開かれました。当弘教寺からは、田中岩男、浅田豊二、西正裕、中野俊和、橋本勝、貝塚俊市の6名が参加しました。

初日の2月21日(日)は12時に受付開始で、13時より開会式が開かれ、14時から記念講演でした。筑波大学名誉教授、真宗文化センター所長である今井雅晴師により「親鸞聖人の東国での足跡」と言う講題で話されました。関東の人々がいかに親鸞聖人を敬まったかというこの講演をいただきました。

2月22日(月)は、7時30分に朝食をいただき、8時30分より晨朝勤行として「正信偈六首引」でした。ご和讃は「弥陀成仏ノコノカタハ」のお勤めをいたしました。9時30分より、鎌倉組の代表の方から「鎌倉組仏教壮年会連盟の活動紹介」の報告がされました。

9時45分から北條祐勝師(鎌倉組光明寺前住職)により記念講演が「相模・鎌倉での親鸞聖人の足跡」と題して行われました。

11時に予定通りに終了し、次回の研修会は鬼怒川温泉と紹介されました。

(貝塚 しゅん)



### 教区仏教婦人会連盟一日研修会報告

3月1日(火)築地本願寺で行われた一日研修会に7名で参加しました。私にとつて2度目の研修で日頃交流の持てな

かった人達とも楽しい会話が出来ました。

「震災を忘れないーいま私にできることー」の講演は若い二人のご住職でした。金澤豊師は「震災から5年、ボランティア減少、人の流出、高齢化と多くの悩みを抱えている。これからの支援は、被災者に心を寄せて気持ちをそのまま受け取る『傾聴』が大切」と話されました。二人目の安部智海師は「流入物の撤去作業で田畑が荒れ、側溝搜索作業しても今だ30数名が行方不明。お茶会、居室訪問などで相手の気持ちを尊重し最後まで話を聞き相槌を打ち、気持ちを共有することが必要」と語りました。私達も相手の気持ちに心を寄せることが大切だと痛感しました。

午後は、仏教讃歌3曲を南荘宏師の指導で歌い、「いのち」の歌詞野の花の小さないのちにも仏はやどるや金子みすゞの「積もった雪」の優しい詩には心を打たれ、これからアザレアで歌うのが楽しみになりました。帰りに坊守さんにお茶とケーキをご馳走になり楽しく実のある研修になりました。

(高橋 ち)



### 組ビハーラ(若宮苑)活動報告

2月18日(木)、午後に寺を出発し、若宮苑へ。毎年2月は高崎の恵保育園の年長さんが参加します。法要が始まり入所者のお焼香に続き、園児も全員でお焼香を済ませました。法話は西福寺の若住職の阿部信親先生が、聖徳太子様のお話をわかりやすく、優しくして下さいました。入所者と子供達も終始、静かに行儀良く聞いていました。

次に、子供達の歌が始まりました。みんな大きな声で元氣よく歌いました。入所者の中にはリズムに合わせて、身体を揺する人、手拍子をする人もいました。特に「思い出のアルバム」の歌の時は、お手伝いの私達もジンとなりました。



帰りの時は、入所者と職員ら全員と握手する子、ハイタッチする子、その場に居た人達をさわやかな気持ちにして、バイバイと手を振りながら帰っていかれました。(佐々木 ゆ)

### 報恩講法要バザー報告

昨年12月5日・6日の報恩講でのバザー収益は、150、367円でした。収益の一部を教区ダーナ募金に送金致しました。ご協力ありがとうございました。

御正忌報恩講に参拝して

橋本勝

1月9日〜10日に冬の京都とは思えない好天に恵まれて、参拝をさせて頂きました。中央教習223回生の私達は、「お念仏のみ教え」によりご縁をいただいた仲間であり、毎年この時期に「であい」のあった聞法会館に集い、報恩講の参拝と同窓会での親睦を深めます。

今回は、9日の13時に大玄関門で受付をし、門徒推進員席に案内されての参拝でした。14時の速夜法要に先立ち、ご門主が御真影(聖人像)を安置するお厨子の扉を開ける「御親開扉」が行われた。続いての速夜法要は、全国からの2500人の参拝者で満堂となり、大師影供作法(念仏正信偈)でのお勤めでした。念仏正信偈は親鸞聖人が作られたもので、日常のお勤めの「正信念仏偈」とよく似ております。同窓会は、聞法会館で各自が昨年の活動内容と、近況などの報告で深夜に及ぶ歓談になり親睦が一段と深められました。

御正忌報恩講に参拝して感じることは、参拝者の多さです。法要の満堂は常で、6時からの阿弥陀堂・御影堂での晨朝修行にも常連者の他、子・孫を伴う参拝者の多いことです。



浄土真宗での聴聞の大切さを学び、私は来年1月15日19時〜16日6時の通夜布教の聴聞を計画しています。

この人 YUKAさん



昨年報恩講お速夜法要で、初のお寺deライブ「YUKAアコースティックライブ」が開催されました。優しく透き通った伸びのある歌声を思い出される方もあるかと思えます。

YUKAさんは、母の影響で音楽に目覚め上京して歌手を目指し苦労を重ね、現在は太田市を中心に音楽活動を続けているシンガーソングライターです。二百を数えるオリジナル曲の中には、富岡製糸場世界遺産登録応援歌「FLY」東日本大震災復興応援歌「強く強く」等があり、芯の強さを秘めた優しさや相手を思い諦めないで未来へ向かおうとする強い姿勢が楽曲に貫かれています。学園祭や県内各地のイベントにも参加して、夢を持つ人すべてを応援したいと奮闘しています。

「そんなあなたがそばにいる」は、何気ない家族の日常に垣間見える「いのち」や「感謝」を静かに伝える一曲です。実家では、門徒である両親と共に仏前に手を合わせ祖父父母の思い出を大切にしているYUKAさんです。

(坊守)

◆ 行事予定 ◆ (平成28年4月 ~ 平成28年7月)

月別	弘教寺の行事予定		教区・群馬組の行事予定	
4月	9日	子どもの集い(花祭り)		
	18日	婦人会例会	23日	組連研(第4会)
	29日	永代経法要		
5月	上旬予定	壮年会総会	6日	組会
	中旬予定	婦人会総会	中旬予定	仏教婦人会総会
	下旬予定	弘教寺ゴルフコンパ	下旬予定	仏教壮年会連盟総会・大会
6月	11日	子どもの集い	8日	組仏婦連盟20周年記念式典
	中旬予定	婦人会例会		
7月	上旬予定	壮年会例会		
	中旬予定	婦人会例会		

※ 編集後記 ※

申年も3ヶ月が過ぎようとしている。日光東照宮の三猿ではないが、昨今の児童虐待や高齢者虐待をはじめとする痛ましい事件には、目や耳を覆いたくなり口にもしたくない。

今年の元旦会では、ご住職より現代のすさんだ心を憂い、「心の豊かさを築き、新しい年を心豊かに力強く歩んでいきましょう」とのご法話があった。今号では「命を考える」特集を組んだが、この機会に「命」や「豊かな心」について見つめ直してみたいものである。(栗原ま)

# 「命の重さ」伝えて

住職

最近テレビや新聞の報道をみますと、いろいろな事件を通して、本当に命が軽くなったなどつくづく思います。一年少し前になりましたが、川崎市で中一のR君が殺害されました。被害者のあどけない、人なつこそうな童顔と、少年らによる残忍なその行為は、多くの人に衝撃を与えました。今も河川敷の現場には献花が絶えないようです。

幼児・児童への虐待や高齢者への詐欺や殺傷事件などを見ます時、対象が社会的に弱い立場の人達の命に向けられている場合が多いように思います。

20数年前になりますが、テレビの報道で、未成年の若者が、高齢の女性を殺害する事件がありました。驚いたのはその動機です。「人を殺してみたかった」というのです。日本の社会の中で、「命の重さ」が見えなくなってきたという恐ろしさとしょockをその時感じました。

昨年戦後70年を迎えました。私自身戦後物のない時代に生まれ、物が豊かになっていく中で、幼少年期を過ごしました。徒党を組み、あちこちで、クワの実やグミなどの木の実を食べ、自然の中で育った世代です。ウサギや鶏を飼い、よくエサの雑草などを取りにも行きました。飼っていた魚や昆虫が死んでしま

うと、庭の一角に穴を掘り、墓もどきの場所を設けて、手を合わせたことも思い出します。幼少期の動植物などの命の出会い、「いのち」の出会いであったのかも知れません。

先日通夜の席で、八十代の男性と会食しながらお話ししていた時、「昔の方が豊かだったように思います」と言われました。隣近所の皆さんや大家族の中で、つながり合いながら、人と人との交流が、密であったように思います。孤独死などあり得なかった時代でした。子どもが悪いことをすれば、おじいちゃんやおばあちゃん、近所の人が叱つたり、お説教をしてくれたものです。

作家の津本陽さんが以前本願寺新報に書かれた文の中に「・・・五欲を満たすためには、恥を恥とも思わない人々がいかに世間に充満していることか。わが身をふりかえればどうか。幼児に祖母からいわれた言葉によって、悪事をつつしんでいるだけが、仏の恩恵であろう。『親様はどこからでも見ていなはる』祖母の声が私の生活を律しているが、煩惱にかき乱された日常を送る凡夫である。・・・」

戦後の昭和30年代位までは、神仏に対し畏れ敬うという畏敬の念が人々の中に存在し、とくに、浄土真宗の門徒は、阿弥陀さまと向かい合うことで、私自身の命の重さを知らしめられ、他の命の重さを感じ、感謝の思いを持って日々を歩んだと思います。本山にご奉仕の活動にいられたおばあちゃんが、雑草を

取るのに、一本一本手を合わせて抜いていたという話を聞いたことがあります。

阿弥陀さまへの畏敬の思いは他の命への気付きとなり、他を傷つけることを律する思いになるのだと思います。

広島県呉市の南林寺滝本誠海ご住職の書かれた本の中にヨシ子さんの詩が紹介されています。

お母さんが食事のしたくをしていた  
なべて貝をたいていた

「お母さん貝は生きているの？」と  
聞いた

お母さんが「生きているよ」といった  
お湯になると貝の口がバクバクあいた  
「貝さんあついだらうな」と思った  
わたしもお母さんも

「貝さんごめんさい」と  
手を合わせた

滝本さんは、この詩のあとにこう結んでいます。この子は「貝さんあなたのいのちをいただくことによって、私たちは生きています。ごめんさいね」と手を合わせているのです。

今私達が生活に追われている中で一番大切なものは何ですかと、この詩は訴えているのですとも言われています。



以前、払えるのに払わない学校給食の未納者が問題になった時代がありました。札幌の主婦が読者欄に投稿した記事にこういう話が書かれていました。

中学生を持つ母親が、学校の職員室を訪ね先生にこう言ったそうです。「私のところは、ちゃんと給食費を払っています。だから給食を食べるときに、『いただきます』を言わせないで下さい」

えー！という思いで読ませていただきました。こうした母親に育てられた子供達は、「いのち」というものをどう躰しんがらられるのだろうか。「命」の重みを知ることができると驚かされました。

浄土真宗の食事のことばをご存知でしょうか。「多くのいのちと、皆さまのおかげによりこのご馳走をめぐまれました。深くご恩を喜び有り難くいただきます。(食前のことば)」というものです。この私の命を支えるためにどれだけ多くの命(肉・魚・野菜など)が犠牲になっているか分かりません。お金を払った、払わないの問題ではなく、食材となっているさまざまな命、それに携たずなわる調理する人、運ぶ人、育てる人、漁をする人など多くの関わりによって、この私の命を生かさせてもらっているはず。このことに気付くことなく、子供達に伝えることのできない親は、失格なのではないでしょうか。

「いただきます」が当時教育・躰論争になっ

た時に、永六輔さんが確か提唱していたと思っただのですが、「いのち」の教育を話されていきました。ドイツではすでに、小学校の教科として、ダイ・エドウケーション(死の教育)が取り入れられているそうです。死ということですから当然「いのち」の教育がなされていると思います。

私は、命の重さを見い出せない日本の社会では、「いのち」の教育を教科として取り入れてもらいたいと思います。教師が「いのち」を伝えるには限界がありますので、医師、看護師、救急救命士、助産師、宗教家など、命に関わる人々を講師に、いろいろな視点から「いのち」を学んでもらいたいと思います。

大切な命のことですので、教科として確立できたらさらによいのですが。

「思いやり」という言葉があります。寺に來られた講師の先生がこんなお話をされました。「団体旅行に出かけ、記念に撮った写真を頂いた時、皆さんはまず誰を捜しますか。ほとんどの方は、自分の位置や自分がどう写っているかを確かめるのではないのでしょうか」一番「我が身」が可愛いということ。この思いを人やものに向けていくことが、「思いやり」であると私自身は思っております。

チベット仏教の活仏いさほふとされるダライ・ラマさんが日本に來られたおり、テレビのインタビューで、「日本人は富・財産を得た。チベッ

ト人は富、財産はないけれど、日本人にはないものを持っている。それは慈悲じいひの心である」と答えられていました。以前テレビで、チベットの僧院で参拝している女性が、あなたは何を仏様にお祈りしましたかの質問に迷うことなく「世界中の人々が平和であることを祈りました」と答えていました。日本人との意識の差を感じました。ダライ・ラマさんが、日本にやってきて、そのものを感じ取ったのでしよう。

戦後の経済発展とともに失われた「念仏の世界」。富山出身の先生が話されていましたが、60年前、少年時代に夕方帰宅のため街中を歩いているとほとんどの家々から、お勤めをする声が聞こえていたといいます。ために大人になってから夕方同じ街中を歩いてみたら、お勤めする家は一軒もなかったということです。

戦後失なわれてしまった宗教性。浄土真宗の立場でいえば、念仏の声がなくなつたということ。そのことと命の重さが見失なわれたこととの関わりは否定できないと思います。

思いやりの心は、仏さまの大きな慈悲をいただく中で、直接、間接に育はくまれるものと思います。「命の重さ」に気付かされるといふことは、仏さまと向かい合う中から生まれてくるものだと思います。お念仏の声が響ひびき合う社会となることを願い、歩みたいと思います。

南無阿弥陀仏 合掌